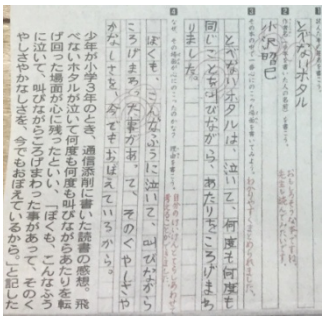
原発避難 私も いじめ

表題の朝日新聞 11 月 27 日朝刊の告白を読んで、朝から悲しく憂うつになった。せめて記事をレポートで紹介し、一人でも多くの人に知ってもらいたい。リードから―福島第一原発事故で横浜市に自主避難した中学 1 年の男子（13）がいじめを受けて不登校になった問題を受け、同じようにいじめに遭ったという中学生の男子少年が、朝日新聞の取材に応じた。「当事者がしゃべらないと、本当のことがちゃんと伝わらない」。両親の同席のもとで、少年はつらかった経験や胸中を明かした。

小学 2 年で福島県から都内に自主避難してきたとき、持ってきたのはわずかな着替えだけだった。ランドセルも教科書もない。その後、卒業までの 4 年間、少年は断続的にいじめを受け続けてきたという。「菌がうつる」「お前が触ると汚れる」「ただで住んでるんでしょ」―。そんな言葉を投げつけられた。教室に飾ってあった図工作品のうち、自分の作品だけに悪口が書き込まれているのを見つけ、捨てた。授業中に鉛筆の先で、足をつつかれたこともあった。給食のときには班ごとに机をくっつけるのに、嫌がられた。無理につけようとすると、担任から母親に「落ち着きがない」と注意の電話が入ったという。少年は「足が痛くて立てない」と登校を嫌がるようになり、母親は数カ月で転校させる決意をした。次の小学校では、全校児童の前で「福島から避難してきた」と紹介された。ここでも、「ただでいいところに住んでいる」「賠償金、いくら」と言われた。「天国に行かれますように」「悪魔に取りつかれませんように」。少年は七夕の短冊にそう記した。小学 5 年のとき、母親が担任教師に改善を訴えた。同じ学校には他にも避難者が通っている。それまでは「強く言って目立つと、他の避難者にも迷惑をかけてしまう」と我慢してきたが、限界だった。「3 カ月待ってほしい」」と担任に言われ、実際にその後、いじめはやんだという。「小学校では、『避難者だから対等じゃない』という感じだった。個性や違いのある者は認めない雰囲気で、避難者は特殊な属性と思われていた」と振り返った。一家は自主避難のため、強制避難者に比べて受け取った賠償金はわずかだ。住宅提供も来年 3 月で打ち切られる。少年は「生活がどうなるのかわからず、とても不安」とも語った。写真下は、少年が小学 3 年のとき、通信添削に書いた読書の感想。飛べないホタルが泣いて何度も何度も叫びながらあたりを転げ回った場面が心に残ったといい、「ぼくも、こんふうに泣いて、叫びながらころげまわった事があって、そのくやしさやかなしさを、今でもおぼえているから。」と記した。


飛べないホタル
小学3年
とべないホタルは、泣いて、何度も何度も
同じことを叫びながら、あたりをころげまわ
りました。
ぼくも、こんなふうに泣いて、叫びながら
ころげまわった事があって、そのくやしさや
かなしさを、今でもおぼえているから。
少年が小学3年のとき、通信添削に書いた読書の感想。飛べないホタルが泣いて何度も何度も叫びながらあたりを転げ回った場面が心に残ったといい、「ぼくも、こんふうに泣いて、叫びながらころげまわった事があって、そのくやしさやかなしさを、今でもおぼえているから。」と記した

（2016 年 12 月 1 日）